

# 戦前期日本仏教のマライ半島布教

中西直樹

(龍谷大学文学部教授)

## 目次

### はじめに

1. ペナン（彼南）関係資料
2. クアランプール（吉隆坡）関係資料
3. イツポー（一保）関係資料
4. スレンバン（芙蓉）諸地域の関係資料
5. バトウパハ関係資料

## 【キーワード】

日本仏教 海外布教 東南アジア マライ（馬來）半島

## はじめに

近代における日本仏教の海外布教は、日本人の海外進出に連動してはじまり、現地での日系コミュニティの発展にともない進展してきた。仏教各宗派が最初に組織的布教に取り組んだ地域も、朝鮮(1)、台湾・中国南部(南清)(2)、ハワイ・北米(3)などであり、これら地域では早くから在留邦人の経済活動に進展がみられた。これに対して、南方の諸地域では在留邦人のコミュニティに大きな進展が見られず、仏教各宗派も本格的に進出することはなかった。また、このため宗派からの支援を得ることができず、僧侶一個人による布教として傾向が強く、まとまった関係資料も残されていない(4)。このため、その布教実態については不明な点が多い。

そこで、別稿で論じたシンガポールを除いて(5)、マライ(馬來)半島各地の日本仏教の布教実態に関する資料を仏教系新聞雑誌を中心として以下に掲出したい(6)。

### 〔註〕

- (1)朝鮮布教の着手経緯と初期の布教実態に関しては、中西直樹著『植民地朝鮮と日本仏教』(三人社, 二〇一三年)を参照。
- (2)台湾・南清布教の着手経緯と初期の布教実態に関しては、中西直樹著『植民地台湾と日本仏教』(三人社, 二〇一六年)を参照。
- (3)ハワイ・北米布教の着手経緯と初期の布教実態に関しては、中西直樹著『仏教海外開教史の研究』(不二出版, 二〇一二年)を参照。
- (4)朝鮮・台湾・ハワイ・北米方面の布教に関する主な資料は、『仏教植民地布教史資料集成〔朝鮮編〕』(全七巻, 三人社, 二〇一三年), 『仏教植民地布教史資料集成〔台湾編〕』(全六巻, 三人社, 二〇一六年), 『仏教海外開教史資料集成〔ハワイ編〕』(全六巻, 不二出版, 二〇〇七～二〇〇八年), 『仏教海外開教史資料集成〔北米編〕』(全六巻, 不二出版, 二〇〇八～二〇〇九年)として刊行した。また引き続いて『仏教植民地布教史資料集成〔満州・諸地域編〕』(全八巻, 三人社)が二〇一六年から刊行中である。しかし、南洋方面に関しては資料が少ないため断念した経緯がある。
- (5)中西直樹「戦前期日本仏教のシンガポール布教」(未発表)。
- (6)南洋各地の布教状況は、すでに前掲『植民地台湾と日本仏教』附章で概説したので、併せて参照願いたい。

## 1. ペナン(彼南)関係資料

(資料1)「馬來半島教信」英領彼南島在 本庄凌雲氏発(明治三七年二月一五付『中外日報』)

本庄凌雲氏は大谷派の僧にて多年海外布教に経験ある人なるが、先年感ずる処ありて支那大陸を経て英領馬來半島に到り、同地在留の邦人に便りて兎に角自己の立脚地と定め、其以上徐ろに半島の内地に分け入り彼の回々教地に向つて教線を拡張せんとの計画なりしが、数年の淹留間略ぼ将来の運寿も認めらるゝ所ありて、去春帰朝の上従来の経過を本山に報告し、特に英領の一島に大谷派教場の公称を許されたれば、其後帰島してより愈半島内地の漫遊を試みしが今同氏発の近信を紹介して半島教況の一斑を示すことゝせり、書中ペラの地名を用ゆるは同島中枢要の都会にして新旧鉄道の輻輳地として、邦民の多くが居留して多年貿易其他の營業を為し居る地方なりと。

(前略) 去る九月のペラ行は乍遺憾全く不得要領に終り申候例年旧暦盆前には必ず総会有之筈の定めなる故死亡者追悼の巡錫旁にて出掛けしも本年は帰朝中の人も多く且一体に多忙中なれば所詮集会は延期さるゝに至らん様の噂伝聞致し候に付、折柄当彼南の方にて孟蘭盆二日の内に迫り居たる事故、空

しく帰檣致候以来機会なき為今日まで何の交渉も試みず打捨て居候、個人として窺得たる内意は大方の処賛同の意向に御座候。

或る一部の人は「イツポウ」（ペラ第二の都会）に在る本邦人共同墓地内に一家を建立して庵室と定め常住の僧を得て傍公済会の事務を処理せしめんと希望を有し居候由来同会の会頭を誰彼と人撰して此の名誉ある名を冠らせては始終に治り悪しき故寧総てに於て局外者たる僧侶の如きものに一任して其権限に放置しなば紛騒少なくして宜からんとの至極単純なる考按に御座候。

彼南在留者の意向は如何と申さば成程僧侶の在住する充分必要と見認めて歓迎に吝ならざれど、さて維持の相談ときは目下の処容易に一举して乗るや否やは断定を下しがたく候兎角金銭を出すといふ事には何処何人も余りに喜ばざる慣なるに当地方は別しての様思はれ候。熟考すれば是非なきか事か留人の多数は世は無常なるを知りつゝ怖れず後生は尚更念頭に懸らず唯々今生を而已吾が世と思惟し其外国に在るや所謂出稼人的根性の人にして、未だ一人の土着を自ら許せる者あらず財を積むに之々たる外仁義王法は表面のみ、子孫に業を譲るの念慮もなければ無論利他を計るの仁者なく況んや百年の計画を立てゝ後来の者に福利を頒たんと志す人や、唯早く財産蓄産して故国に帰れば以て足れるもの外国に在る間は自ら心を鬼として得意とせるものゝ如く、かくて財産を積み出せば帰朝して余命を閑日月に栄まんと理想に過ぎず集り来るもの総て意志相同し、斯様なる新陳代謝的腰掛例は南部垂細亜に在る本邦出稼人の通情に候。実業家のなきも企業家の起らざるも決して偶然の事にあらず思へば国家の為め長大息の至りに御座候。（未完）

（資料2）「馬來半島教信（続）」英領彼南島在 本庄凌雲氏発（明治三十七年二月一七付『中外日報』）

現今彼南在留人の内幕を発かば其内腹豊かなる人至りて少なく甚だしきは日毎の生計さへヤツトの事に営める向きも多々有之様なればかゝる地位にありては仮令礼節を知るとも常に衣食に追はれて顧るに遑なきは道理に候、近来日本人街の衰微せしこと正しくは同業者の増加に伴ふ結果ならんが一は又半島に於ける各種事業の不振にも大に基因せるならんと存候。

小生の宿志にては差当り当地のペラとの本邦人を挙げて団隊的信徒を作りて永年に備ふる維持金を一時の寄付か若しくは幾年かの継続法によりてか積み立てて以て充分教場の基礎を固めてさて布教にかゝらんと的確乎主義なりしも、前に挙げたる如き情態なれば今急には到底行はれ難く候に付従来の通り独力にて継続し機運を待ちて拡張せんと云ふ漸進主義に改按仕り候、兎角信徒はなくとも帰依者はあらずとも公に開教場設立の発表文はなし置かんと思へとも年内も余日少なく相互多忙の折節なれば新年を待ちて早々披露に及び大に大乘無上の妙法宣布に尽瘁せん心算に御座候、目下他人の楼上に寓居致し居る事なれば間狭にて少々不便を感じることに候。

学校は懇意なる人の情によりて一室を借り受け居り候へ共是も中々不便少からず候故程よき借宅もあらは早々越し度山々に候へ共何分日本人街に家を求むるには多く株譲りと相成居候、其れもはした金のことならは何時にても借るに易けれと住荒らしの家にて通例五十円以上百円少して内部の造作居きたる内は四百円五百円等の暴価も有之候、他街に離れてなれば多くは株もなく家賃も廉に且住居としては閑静にして恰当の場処多々有之候へ共強ひて紅塵万丈たる日本人街に高き生活を営みて居を置かざる可らざる情実有之候そは小生か唯一生存機関たる学校と密接関係の挿まる事に候（完）

（資料3）「ペナンの開教事情」（明治三十九年一二月二〇日付『中外日報』）

今回帰朝せられたる馬來半島ペナンの開教師本庄豊二氏（大谷派）の語られたる所に依れば。

ペナンは前途有望なる新開地にして、年年人口を増加して行くが、在住民の八分は支那人にして各階級

の大部分を占め、余の二分は土人、欧米人及び支那人以外の東洋人なり、本庄氏の経営せらるゝ開教場の所在地なるジョージタウンは約十五万の人口を有する大都会なり、而して氏は去る明治卅四年彼地に渡り倭屋を借りて住宅となし、其処に形ばかりの本尊を安置して、在留邦人の礼拝所となせしも、誰れ一人参詣するもの無かりしかば、最初より少しも宗教的の儀礼を事とせず、専ら在留邦人の子弟を教育したり、然るに其の後開教の見込立ちしにより、三十六年中本山に建白して開教権の授与を請ひ、愈々其の允可を得て、開教場を作りしかは卅七年七月なり而して布教としては、毎月二回法話を開き、又教育の方面に於いては毎週一回宗教的の修身講話を公開し、其他は専ら毎日在留邦人子弟の小学教育を司りしが日露戦争の頃より別に家事の一課を設け又時々戦況報告会杯を催ふしたり、尚ほ毎年一回若しくは二回、馬來全土を巡回して視察旁々布教を試むるを例とせりと而して氏は最初より本山及び在留邦人の援助を借らず、全く独立の経営なりしが故に、万事、急進主義を取らず、強いて教線の拡張を図らず、小なる設備と狭き範囲とに於いて経営し來りしが、本年の春に至り、在留邦人より、不十分ながらも生活費丈けを負担せんことを申し出でたり。（未完）

#### （資料4）「ペナンの開教事情（続）」（明治三九年一二月二二日付『中外日報』）

然れども氏は、此の生活費を支給せんとする在留邦人の申出に対して、之を応諾する条件として、今の如く会堂に集まる者も少く、従つて布教感化の実績挙がらずんば、畢竟尸位素餐をなすに過ぎず、空しく生活費の支給を受くるが如きは衷心大に疚しき素なれば、寧ろ本地に帰りて布教に尽瘁するに若かず、されば、諸君に於いて、飽くまでも予を此地に駐めて開教せしめんと欲する精神ならば、生活費の支給は兎に角、宜しく布教伝道の外護者となり、例へば、墮落し易すき下男下女の輩を成るべく、会堂へ参集する様勧告せられ度き旨、氏の意見を述べられしに、在留邦人快く之を諾しられれば、永く駐在開教するに決し、さては今回仏前の莊嚴に要する仏具等を新調し、兼ねて教育の参考書類を蒐集せんが為め、暫時皈依せられし由にて、不日皈依の予定なりと。

而して本邦人にてペナン開教の先鞭者は禅宗の某氏にして、始め印度に赴かんとする途上、同地に錫を駐めしが縁となりて、同地に在教中、在留邦人相集り寄附金を醸出し、小教会堂を建てんとするに至りしが、其の後病気の為め、事業半ばにて皈国せりと、尚ほ、同地に於ける宗教思想は、極めて冷淡にして各人唯生活難に逐はれつゝ、其の日〽を送る有様にて、殊に本邦より流がれ込める多数の醜業婦は、自暴自棄の惨境に陥り、故郷を憶ふ念も全く失せ果てゝ、浅間敷き動物的の生活を為す者比々皆な然りと、されば氏は、憐れむべき此等の醜業婦に対する、教育と伝道とに全心を捧げ居れりと、序に馬來全土に於ける各宗教の趨勢を一言せば、婆羅門、基督、回教最も盛んにして、支那の移住民間には支那流の祖先崇拜甚だ盛んなり、而して暹羅盤谷府辺より暹羅的の仏教流伝し大に布教を試み居る由。

尚ほ氏の語りし所によれば、新嘉坡には曹洞宗の釋種樸仙氏と云ふ人、十数年前より移住せらるゝが、土語には極めて堪能なる由にて、先年スマトラ島へ天文研究の為め吾邦の学者来遊せし時、同氏は其の通弁の勞を取られたりしと、而して同氏は目下同地の共同墓地に小庵を結び椰榆樹を栽培しつゝ生活し、直接に布教的態度を取られざる由。（完）

#### （資料5）「南洋人の日本留学」（明治四四年一一月一九日付『中外日報』）

▲南洋仏教の発展のため ▲一人は医学二人は仏学 ▲南洋曹洞宗の肉山

南洋馬來半島シンガポール以西に日露戦争の際露国婆艦隊隊が寄港したるを以て有名なるペナン（庇能）と称する英領殖民地より、元來シンガポール附近は仏教の盛なる土地なるがペナン市にも仏教信者頗る多く、従つて仏教寺院も建立せられ居る由なるが、此度ペナン市の極楽寺といふ大寺より、其徒弟釋寶菴（二九）釋圓智（二三）釋普仁（一八）の三人を留学生として我日本に派遣し、去一日神戸着去

三日東京に到着したり、此等三人の中寶菴氏は将来ペナン市に仏教主義の模範病院を建て、或は施療施薬に、或は救護院等の慈善事業に従事するため医学研究の目的を以て渡来し、他の二人は将来興学布教に従事せんがため専ら仏教研究の目的を以て渡来したるが、これより先きシンガポール領事岩田讓吉氏は熱心なる曹洞宗の信者なる処より三氏の志望を壯とし、原内務大臣宛に三氏の留学斡旋を依頼する旨の進展書を送り置きたるため、彼等は到着後直ちに内務省に出頭したる処、斯波宗教局長及び小橋衛生局長等専ら其就学の方法を考究したる結果、ペナン極楽寺は日本曹洞宗と同宗派なる支那曹洞宗の流を汲む寺なるを以て、三氏の教育は挙げて日本曹洞宗に囑託するに如くはなしと、去八日曹洞宗務院総務弘津説三師に此事を依頼したるに同師は早速之を承諾し、教学調査員大森禪戒師及び曹洞宗大学講師松田悟堂師に三氏の教育監督主任に囑託し、其方法を考究中なるが、此程内務省と協議の結果小橋衛生局長の尽力により、医学博士高木兼寛氏の快諾を得、釋寶菴氏は去十六日芝愛宕町慈恵医学専門学校に入学を許可せられ、去十七日より通学し居れりと猶三人の中寶菴氏は今より三年以前日本留学を志し、曾て神戸に六ヶ月間居りしことあり、又ペナン在留の日本人より日本語を学びたるため、日本語は通弁なく自由に対談し得るを以て、日本人に雑りて教育を受くるも何等不便を感じずといふ、他の二人は近々中日本語の専門学校に入学し茲一二年は日本語の学習に従事したる後、曹洞宗大学に入学する見込みなりといふ、猶ペナンの極楽寺といふは、今より二十三年前、釋妙蓮といふ支那福州古山曹洞宗の一僧侶が布教のため、ペナン在留の支那人及び諸官衙の賛助を得、三十四万六千余円を費して建立し今日に及べるものにして、妙蓮は三年前に遷化し、現今其の後住として釋本忠師及び法師として釋善慶なるものありて、布教に従事し居れりと、且つ同寺は数十丁に渉る護謨林を有し、其の栽培により十年後は数十万円の財産を有するに至るべく、現今にても日本各宗の本山と匹敵すべき程の寺有財産を有し、常に自動車馬車等を所有し、往来には寺僧徒歩を要せざる程の贅沢を尽くし得る肉山なれば、彼等三氏が予定通り五年間日本に留学したる後は、理想的の活動を試むるを得べしと、猶同極楽寺及び其付近の曹洞宗寺院は、将来我が日本曹洞宗の宗制制度を倣ふべく、又た往く往くは日本曹洞宗と同盟して南洋布教に全力を注ぐ方針なりといふ、且つ同寺には昨年五月五日英国戴冠式に臨める我が東郷大将及び乃木大将が立寄られ、将来有望の寺なるを見彼等三氏に告ぐるに日本にも同じく曹洞宗兩大本山あるを以て、日本に留学せられては如何との勧告が動機となり、又本年九月大島大将も亦た渡航の途上此寺に立寄り、同じく日本留学を進められたるを縁とし、同寺住職も遂に決心して三氏を日本に留学せしむるに至りたるなりといふ、是南洋人日本留学の嚆矢なりと謂ふべし、猶極楽寺住職より曹洞宗大本山永平寺に宛てたる親展書は左の如し。（以下略—筆者）

#### （資料6）「彼南の横顔」（南洋及日本人社編『南洋の五十年』章華社、昭和一三年）

ステンガを一杯引掛け、二時から山田氏に案内され先づ共同墓地に参詣、軍艦最上病死者の碑に花輪を捧げ、三宅金八氏の力説に依り同氏歿後昭和三年建立された無縁塔にも線香を上げ、更に松木中尉の石碑を拝み極楽寺見物に行く、お寺の昇り口に数件の飲食店等が出来、印度の塔だ暹羅の塔だと益々俗悪化した様に思へる。住職は病気で代理の台湾人江善慧和尚が来年の建立五十年祭の用件で目下神戸に行つて居るとの事であつた。

## 2. クアランプール（吉隆坡）関係資料

#### （資料7）「馬來半島の仏僧」（明治四二年五月三日付『中外日報』）

仏光寺派の文学士有馬憲文の令息なる有馬文讓氏は昨年印度方面より入蔵する目的を以て単身新嘉坡に向けて出発せられたるが、馬來半島セランゴール州コランボ市在留の我が同朋と親み爾來熱心に布教に従事し居られしが、益々仏縁を結ぶもの多くなり行くに依り入蔵を断念し、専らコ市在留の同朋

の布教に従はるゝ決心を固められたる由、此に掲ぐるものは此の程本山に向けて送り越せる氏の書状なり。

拜啓一月七日付の御下付品並御書状難有拜受仕候、野衾も一月十四日ペラ州イツホ市を出発、半島一週終り印度に入る心算にて此地に來り候處、因縁の地にや愈永住居を定め之より半島の開教に従事致すべく候間御承知相度候、此地は前滞在地の隣州にて汽車にて前地より十時間を費し候、市の設備も可なり行き届き博物館、公園はやゝ觀るべきもの有之候、全州通じての日本人は一千人に候はんも何分前申上候如く馬來人、支那人に嫁したるものゝ分は生死不明にて日本人と一切交際せず、山奥に隠れて反つて日本人を敵視し居る有様にて其馬來人等の生活の有様はとて御話に成らぬものに候、病氣とて菓餌を与ふるにあらず死亡すれば死体は毛布に包み山野に放棄するの悲惨の有様に候、日本婦人の愚なる現在如此有態を見聞しながら彼等醜業婦は抱主に無断逃亡する有態に至つては何とも手の下し様なく追て伝道の際には申聞せ候、当地滞在のもの五百人、内男子百人内外に候、此等は稍や見るべく候へ共、これとて何時逃亡するやも計られず、故国にある父母は如何に彼等の行末を案じ居るものにや一掬の涙を催し候、全州交通便悪く此山中に一軒、向ひの山中に一軒と云ふ有様にて丁度日本の村落に女郎屋が一軒づゝある如きものに候、御承知の通り熱帯の樹林の鬱々たる昼猶ほ暗き山路を分け入りたりて立ちながら強いて一席の伝道を試むる有様に候、彼等の主人なるものは説教を全く歓迎いたさず何となれば醜業婦に説教を聴聞せしむれば慕郷の念を起して勇気を落さしめ其日の業を妨げせしむと云ふに有之候、実にあはれの申分に候、主人其人が斯の如き猛獸の人物に候へば如何とも致し方なく候、山中は山林病に罹りて斃るゝもの多く有之、何分にも年が年中我が邦の六七月の候にて目下は八月頃の氣候に御座候、兎に角に前陳の如く当地に居を定め候間又時々狀況申上候、我が本国の伝道の困難なるは誰人も其の味を知れども当半島の伝道難は知るもの少なかるべく到底内地人の夢想だに及ぶ所にあらず、香港辺までは猶ほ日本氣風も失せざれども新嘉坡より南下すれば南下する程漸次人間が格別に候、大谷派の僧本庄某なる人海峽殖民地たる彼の南島に開教しつゝあるも去一月限りにて引上げ候が以て開教の困難は察せらるべく、引上げの原因は第一維持の困難にあり、家屋一軒の借賃が普通五六十円、他は推して知るべし一年中に死人が五六人位ある程の状態なれば法要とて余りなく従つて布教費扨別に産み出す道もなければ稍もすれば布教の第一義を没却する事の往々生ずるも止むを得ざることに候、野衾の経営が後の世の人の一助にもならんかと存じ永久的に計画仕居候。

馬來半島セラノール州コヲランボ市にて 有馬文讓

#### (資料8) 「馬來半島の仏教」 (明治四二年八月一五日付『中外日報』)

馬來半島には二千人の在留日本人あり、去年以來仏光寺の有馬文讓氏移住日本人布教に従事し居らるゝが、帰向浅からずして愈々の説教所を新築することゝ成り、日本人幹事井上某の去月帰朝したるを率い説教所に要する仏具其他万般の用度を調べて歸島せられたる由、有馬氏の近信の端に云く、小生も近来多少馬來半島通に相成申候、而し未だ足跡の至らざる處多く其通過せしはペラ国、彼南島、スランゴール国に過ぎず候、汽車にて田舎には時に法要に出かけ候、通例一時間位までの地域までに候、中には近国にては長崎から熊本まで位の行程の所に行くことも有之候、平生は種々の方面即ち教育、慈善、宗教、外交等の任に當り候、慈善的の事は公德会と云へるを設け在留者の死亡せしものには六十円、帰国のものには旅費を与へる等の設備ありて会員目下六百名有之候今年は此地にも初盆六名有之候、生が葬式せしもの三名、即ち本年正月より通計三名に候、從來死者に対し御經一卷読む者なく哀れのものに候、(中略)半島も今や僧侶二名を有せり、目下猶ほ僧侶の必要を感ずる所も有之候へども、熱帯の氣候と、一般の人氣は到底尋常一樣のものにあらず、而も得る所の報酬は知るべきのみ(即ち天草、島原辺の風俗にてやられる)此地には逮夜と申すものなき故、平素の仏事に至つて閑散なり、猶來住する

ものは無頼者のみ、中に多少志ある同志もあれど朱に交れば赤くなるものにて、真面目なものなく内地に於いても僧侶とて金を得るは非条理なれど、外国に於ては一層甚しく生等も漸く露命を支へ居るまでに候、毎日旅館に食費二十円を払い居り候、参考のために受取封入間御一笑を請ふ、コーヒを毎月来賓やら自分やらにて五六円を用い候、内地人には暴なる感有之候はんも外国に一度行きたる人は承知いたすものに候。

為に中に生活の困難を覚へ候、今や何等の慰藉するもの之なく候、唯々日夜将来に残すべき事として牛歩的に前陳の事業を進歩せしめ居候。

印度行も準備致し居候へ共、何分目下志しつゝある事業も多少其緒を得ざれば放棄するに忍びず、されど今や会には三千円の積立金を得候、これ同胞危難の際支出すべきものに有之候。

而し今日の観測にては半島の将来の発達及び吾等宗教家は如何に経営せば宜敷方法を得るやは研究を要するが、第一地理に比較して人口（人口とは日本人を指すのみ）の稠密なるは其経営上多大の関係を有するものにて吾人は人口を基礎として立つべきものなれば之が増減は此種の事業の盛衰を計る計量器となることゝ信じ居候、新嘉坡には今や三千人余一定の区域にありて散在せず、為に各種の事業も経営すべし、されど往年本派本願寺の経営に着手したる布教も今や全く水泡に属して其路を見ず、之を探れば種々なる事情の本山の知らざる点に伏致し居候、大凡海外の事業に当る人は、一度海外に一年有るも居住せざる人は不可能に候と信じ申候云々、猶ほ氏は日本人小学校を開始すべく我邦より国定教科書を教師用生徒用共取寄せたる由。

### （資料 9）南洋及日本人社編『南洋の五十年』章華社、昭和一三年

吉隆坡日本人会は厚德会の延長発展したものである。明治卅二年共同墓地創設、大正五年八月日本人会と改称し始めて政庁に登録した。昭和二年三月関師来吉、お寺で好意的に児童に初等教育を授け七年九月一日から日会で小学校を経営することになり、引続き関和尚と藤井氏が先生となつて居るのである。現在生徒廿九人、中二人は聴講生、月謝一弗、一軒から二人以上出てる場合は一人の外五十仙、総て英語学校に行つてる子供ばかりなので、土曜日曜とホリデーの朝八時半から三時間午後一時間半で国語と修身に重きを置き五六年生に国語と日本地理を教へて居るそうだ。

それからピラニー路の日会共同墓地に行つて吉隆寺の関和尚を訪問、関師はリウマチで未だに膝が痛むと云つて居られ夫人は重病で福岡医大に入院、最近漸く快方に向はれたとか。

お墓は現在百十四基、昭和九年仏教婦人会で立派な無縁塔が建立され境内は隅々まで手入れが行届き、大きな樹があるので非常に落ち着きがあつて気持ちが良い。昔からの世話人は富木、近藤、天藤氏等であつたが今は総代佐竹、竹内、天本、桑山、世話人坂口、東山、林田、勅使河原、松田、渡邊、三原諸氏で月々の仏所米を出してるのが卅七八軒、毎月十七日観音講の参詣者廿六七人。尚吉隆坡日会では一万弗で小学校と事務所建築を三年計画年二回分納で集めつゝあるとの事であつた。

セランゴール州日本人会 極古いことは不明であるが吉隆坡に広徳会と称する在留邦人の互助機関が出来たのは明治廿七八年頃のことであつた。明治卅二年政府より土地の下付を受け共同墓地建設引続き大正六年に至り、藤井領事の斡旋で券めて日本人会と改称、登録の手続きを終へ今日の完全な組織立

### 3. イツポー（一保）関係資料

#### （資料 10）「馬來半島邦人弘済会」（大正二年一月九日付『中外日報』）

弊社が先年開催したる仏教大講演会の前後長らく写真班として活動し居たる今井文治郎氏は其後英領馬來半島怡保に渡航し居れるが、昨日社へ書を寄せたる中に下の如き記事あり、当地（馬來）は在留邦

人少なからざれども一人の僧侶なく、死者ある時、其埋地はあれども読経するものなく随つて葬送の式を行ふこと無論これなく、埋地に持運びて唯一片の石碑を立つるのみ、其憐れさは中々に想像の及ばざる程なり、依て氏は在留邦人と協力して同地に一の弘済会なる慈善団体を組織し日本人共同墓地の管理其他一般慈善に関する事柄を処理すべく広く義捐金を募りて既に設立したる模様あり、尚葬送の用に供すべく全部黒塗の寝棺運搬の馬車(長さ六尺三寸)を作り其他仏壇を建造する等目下着々準備中なりと。

(資料11) 「馬來半島より謝状」(大正二年九月五日付『中外日報』)

本社曩に在馬來半島今井氏の依頼に依り仏像仏具の購入方に或る便宜を計りしが本月十二日無事到着したるに依り氏は左の謝状を送り来れり。

拝啓時下盛夏の候に御座候処貴社益御発展奉大賀候、弊会先般仏具購入の事に就き御依頼致し候処御多忙中に関らず御尽力被下難有存候、御蔭を以て本月十二日無滞安着仕り候早速在留日本人墓地に安置致し諸氏の命福を祈り会員の信仰心を固むる事と致し候、御蔭を以て月々在留者を増加致し其業務に従事致し海外の異域に同胞の小天地を作り居り候何れ今後も仏教の事に就きては御願致し事も有之べくと存候其節は何卒宜敷御願申上候先は会員一同に代り御礼まで如斯に御座候早々頓首

大正二年八月十三日

馬來半島ペラ在留日本弘済会

今井文治

中外日報社御中

(資料12) 「馬來半島の本宗教会所」(『日宗新報』一三三一号、大正四年五月二日)

曾て本誌教報欄にて報道ありし、肥前大村町に莊麗なる本宗教会堂をば建立せし篤信家原口駒吉氏は数年前より馬來ペラークのイツポ市に在住し呉服雜貨商を営み頗る有力家なるが、先般濱井日成僧正を介して小生が贈りし書翰の同返信に因れば

「当イツポ市はご案内の新嘉坡市を離る三百哩余の地にて少数の同胞も在住致し居り候、併し在留の邦人は重に島原、天草の出身にて真宗門徒多く日蓮宗は拙宅を除きては他に殆んど一軒も無之候間左様御承知下され度候、当イツポ市を距る五哩珈琲山と申す地に清き温泉有之候、殊に同所には美事な天然の岩窟有之候為め老後の楽みとして一箇月数回入浴に参り候へば又一般入浴者の行通便利をも謀り自費を以て道路を作り居り候処一昨年偶然日蓮宗の御僧日宗海外布教の目的にて当市に拙宅を尋ね下され候為め此御僧と協議の上右の岩窟を法華の道場となし巖龍寺と称へ居り候、御僧は一昨年より今に同寺に在住日々読経に余念なく候、場所が温泉だけに参詣者も比較的多く依然小生が信徒総代の役を務め居り候、何れ御光来下され候節は御案内申上ぐべく候御僧は熊本県出身に馬場禎誠と申され候」(上下略)

と有り頗る本宗の為に尽力せられつゝ在るは吾人大に意を強ふする者あり。殊に馬場師の如きは三十五六の青年にして暫く朝鮮に布教せられ居りし仁師なりと曰ふ。因に同師は今春上海本圀寺別院より日蓮宗大学に入学せられた竹植龍海君の知人なる由孰れも宗家の為に賀すべき事なり。(岡教遂報)

(資料13) 「南進!!!南進!!!南国の原智耀師へ加藤文雄より」(『日宗新報』一四一二号、大正六年九月一五日)

原さん。お別れしてから早や五十日にもなりませうか。(中略—筆者)

炎暑焼くが如き海峡殖民地から北の方、印度洋に面して一千余哩、セランゴール州タンジヨンマリーンを起点とし、更に鉄道を北すれば、貴師の御住地のペラ州イツポー市に着するのですネ。ペラ州は馬來



半島の一国で人口約三十万を数へ、邦人も、イツポー市を中心として大分入り込んで居り、錫や護謨やを主産物として居ると聞いてみます。邦人の多いといふことは、力強いもので、御事業にも張合があらうと存じます。市は殷賑であると承はつて居ります。たゞ奈何底にか暑いかしらと、夫ればかりは想像も出来ませぬ。而し、貴師の御物語りにも有りました通り、イツポーの名物たる大理石の大洞の中に構えられた神域たる貴師の経営さるゝ巖龍山法華経寺のみは暖国の熱悩を余処にして、涼味掬すべき境地と申すこと。殊に香高き天然の温泉は神園の前庭に四時に湧き出でて絶えず、名だたる霊泉。更に仏国土を荘厳すべき蓮の花麗しく開く清涼地に接して居るといへば、天上極楽の世界を遷したる風情やあらん。洞中に設らへたる数十畳敷の大仏間の中央にはこの度新たに貴師が内地の有志の助縁を求めて渡された仏具一式が厳かに飾られ、中央正面の拝壇には高く聖祖大聖人の御尊像が奉安され、朝な夕な、唱題読経の声を断たざるに至つては、一種崇高の感に打たれざるを得ないでせう。

貴師は此の神園を中心根拠として南地の四方に日夜奔走せられて寧時ないことと推します、嘗て、密航を企てた人、今は堂々公認の開教師凡ては仏天の御命令であると感謝して下さい。尚ほ承はれば、貴師は此の聖業に着手する序分準備としては、半島のピナンに在つては、半島のピナンに在つて護謨の栽培に従事し、一箇の労働者たるをも甘んじたと申すこと。

当年の困苦によつて貴師は凡ての困難に打ち勝ち得べき素質を養ひました。此の立派な素質は貴師を現在及び将来の希望と光明とに導きます。どうぞ、旧は倍する御健闘を祈ります。

**(資料 14) 「南洋馬來半島本宗寺院の公認」 (『月刊宗報』六七号, 大正一一年六月, 日蓮宗宗務院)**

馬來半島ペラーク州イツポー市外を去る二哩なるインブンと称する石山に鍾乳洞あり其下に温泉湧き出で居る勝地に大正二年九月十二日馬場禎誠師原口たつ女等イツポー市邦人の援助によりて本宗の寺を開基し私に巖龍山法華寺と号せり大正四年九月岡教達師印度留学の途上此靈洞に詣し石壁に玄題を大書し後ち同地方の邦人石工をして縷刻せしめ今に巖として在り、大正四年十一月より布施耀玄師の弟子原智耀同寺の主任となりて馬場師に代り、已後孜々として寺門を經營し、温泉を日本人の共有遊園地とし、寺院の許可願を英国の海峡殖民地政庁に出願しありしが、本年四月三日同政庁より法華寺を公認せられたり、是れ実に南洋馬來最初発軫の法華道場にして広宣流布の一実現なり (原智耀報)

**(資料 15) 「須賀布教師馬來半島赴任」 (『月刊宗報』二一八号, 昭和一〇年二月, 日蓮宗宗務院)**

馬來半島ペラ州イツポー市外日蓮宗教会所は主任原智耀師遷化欠員の為め後任者詮衡中のところ、昨春立正大学社会科学卒業の須賀勝玄師派遣に決定、此の程凡ての手續を完了したので、来二月二日神戸解纜の銀洋丸にてイツポーを中心に広く南洋方面開教の雄途に上ることゝなつた。この行を盛大にする為有志相謀り一月廿二日午後三時半より宗務院楼上に於て送別の宴を催した。此の日特に管長猊下臨席され激励の御詞があり、三部長初め宗務院側十六名、立正大学より守屋学部長望月予科部長木村専門部主任久保田社会学主任其他教授出身者学生等三十余名来会、厳肅盛大な訣別宴が行はれた。斯て同師は約百名の多数見送り裡に廿九日午前十時半東京駅を出発した。本化魂に元気一杯な同師の健闘を希ひ、其の健康を禱祝してやまない。

**(資料 16) 「英領馬來布教所の近況」 (『月刊宗報』二二八号, 昭和一〇年一二月, 日蓮宗宗務院)**

英領馬來連邦ペラ州怡保市外布教所は須賀勝玄師赴任以来頓に教勢の伸張を見るものあり、最近右布教

所の報告によれば、同州に於る信徒総数はイツボ、コーランボ、ピナン、タイピン、カメロン、トレンシン等に於るもの合して九十四戸二百九十名にして日々参拝者の比率は印度人、支那人八〇%、諸外国人十五%、日本人五%である。而して定例布教としては毎月廿一日怡保日本人会墓地礼拝堂に於て御妙判講義並に法話を行ふ他、日本人会クラブ、青年会クラブ、其他随処に於て講演法話を行ひつゝあるといふ。

#### (資料 17) 南洋及日本人社編『南洋の五十年』章華社、昭和一三年

ペラ州日本人会 大正三年五月藤井領事の尽力で青年会と精英日本人会が合併しペラ州日本人会と改称し初めて組織立つた邦人団体となつたのであつて、相当昔は紛争の絶えなんだ土地で共同墓地やお寺の事に関してすら幾度か問題を起してゐたのであるが、廃娼後互に和親を計り共同一致事に当る団体的訓練にも馴れ、特に最近は協力在留民の発展を計ることに鋭意努めつゝあるのである。尚一保市にはまだ小学校はないが共同墓地に真言宗の寺院(現在無住)あり、温泉の湧出するタンモンの洞窟に日蓮宗が一寺を建立し四時参詣の善男善女絶へず地方の一名所となつて居るのである。

#### (資料 18) 「マライ通信」イポー市温泉寺 岡教遂(昭和一八年八月一二日付『中外日報』)

○新領土マライは最早や建設戦に転じ目下産業戦士の活躍目醒しく大いに見るべきものがある、宗教方面に於いては未だ其域に達せず私は其第一陣を承つたが、後続部隊二陣三陣の殿軍断潰せる為め推進力遅々たる遺憾がある、日蓮宗二ヶ寺昭南妙法寺と小住嶧嶮温泉法華経寺だが昭南主任岡野潮醇師は敵軍に拉致されて未だ帰らず孤軍奮闘の苦戦を重ねてゐる。

○真宗は昭南本願寺に従軍布教使二人来り、臨時主任の法将となり英霊の護持を為し、最近其の一人はスマトラに移駐した。

○禅宗は昭南に西有寺、コーランボに吉隆寺が有る、両主任共被拉致者だが昨夏踰越された、マラッカにも一寺が在るが連絡が絶えてゐる、又華僑の多い現地では支那寺は沢山ある、就中ピナンの極楽寺は其尤なる物である、多くは黄檗禅宗であるが禅・念・密・道・四宗一致の宗教である。

○原住民中マライ種は表面回々教徒だが裏面には祖先伝来の龍蛇崇拜教者であり、クリン種(昆崙)は回々教に婆羅門教を混じ極少数基教徒もある、パンガリ種(北印度パンジャツプ人)は婆羅門教(現称ビンヅー教)を奉じてゐるのが現状の大概である、然らばマライ原住民に日本の大乘仏教を布教して広まるかといふとマライ人種間には最も多く有るかと思はれるふしがある、其は彼等の習慣には日本の神代にみらるるやうなものが多分に有るからだ。(昭和十八年五月二十五日記)

#### 4. スレンバン(芙蓉)諸地域の関係資料

#### (資料 19) 南洋及日本人社編『南洋の五十年』章華社、昭和一三年

芙蓉邦人共同墓地は明治廿八年五月笠田氏等の主唱で約一英反の土地を買入れ創設されたのであつたが、当時在留邦人廿余名に過ぎず容易に政庁の許可を得ることが出来なのだが、八方奔走して漸く許可を得八十余本の護摩樹を植えて将来の維持費としたのであつた。卅七年八月厚道会組織され明治廿四年以来の同胞病歿者廿七人の石碑を作り休憩所を建てた。大正五年一月日本人会成立その管理下に移され現在に至つた。墓標二百余基。

光徳院と親老会 光徳院は始め朝永ちゑ夫人が墓地休憩所内に位牌所を寄進され(大正十五年開堂式)先人の霊を祭られたのが建立の基礎をなしたもので、斎藤師大正十年來芙、十一年七月から原氏に代り日会書記となり在職七年、機縁熟して遂に同寺の誕生を見るに至つたもので恰度その頃松本よし女が子

供をなくして三百八十餘弗を喜捨される、朝永夫人が又別に百弗の寄付金を集め、本堂庫裏等の建築に着手、昭和三年二月四日曹洞宗本山管長代理山田師渡暹の途芙蓉に立寄られた際同寺の事を本山に申達され六月十四日寺院として公認の指令到着、石川素堂師(大円玄智禪師)を開山とし四年十二月入仏式、大隅氏より基本金として馬來護摩株三千円の寄進あり、今年は四分配当で月十弗位利子が貰へるとの事である。婦人会員七十二名、毎月十七日と廿一日の集会には必ず十人内外の出席がある。

## 5. バトウパハ関係資料

### (資料20) 「バー市布教所設立」(『教海一瀾』八二五号、昭和一〇年九月二五日)

新嘉坡より北方百哩馬來半島ジョーホール州バトバハー市は中部西海岸の都市にして、近時邦人の移住激増に伴ひ「本願寺布教所」開設希望の切なるものあり、本年八月十日付にて、新嘉坡駐在渡邊智修氏より本山に対し設立申請中の処、本山にては九月三日付にて許可せられ、御本尊並に仏具等を下付せられた。

### (資料21) 南洋及日本人社編『南洋の五十年』章華社、昭和一三年

バトバハ在留邦人

一同朝のメールでバトバハに帰り日本人会に寄つて見たが、上野書記は三五公司の山に出掛けてみて留守、南吧商店で小林氏から大体町の様子を聞くことが出来た。

バトバハ在留邦人は四百六十四名、町だけでは四十軒百卅人、齒科医二、雜貨店五、モーターボート二、写真二、ホテル二、散髪二、撞球場四、一番の古顔は在巴卅四五年の桑池よね婆さんと卅年の松田昇太郎氏であるが、ブンノーには馬來のボンゴロに嫁し約四十年も居ると云ふ婆さんがあり、今は娘の婿がボンゴロになつて居るそう。本願寺出張所を訪ひ井上師に案内されてすぐ近所の小学校を參觀した、生徒卅人、一年十三、二年五、三年八、四年二、五年二、で開校は昭和七年、山川先生は八年六月來巴、今は井上師夫妻も加勢して居られるのである。授業は既に終つてみたが遊んでみた児童が「いらつしやい」「左様なら」と声を揃へてお辞儀をするのがとても可愛かつた。

本願寺護持会員約百名、毎月十四日の定例布教日には大概十五六人の参詣ある由、出来たばかりのお寺だが皆が非常に好く世話されるので非常に心強く思ふて居ると井上師は云つて居られた。

### (資料22) 「バトバツハ 皇軍進軍とお西の計画」(昭和一七年一月二二日付『中外日報』)

輝しき皇軍は遂にマレー半島の徹底的制圧となつたが、ジョホール州のバトバツハ政略の報を得た西本願寺本山では戦前宇佐義亮駐在を派して居たところあだかも同氏の帰朝中に戦争となつて案じて居たが皇軍の進駐を期して本山では種々その復興で案じて居る、なほ本山の南進については最近某方面に新しい人の登場など着々計画して居るが新しいところではこのバトバツハに活動して居る石原廣一郎氏の南方談などきく催などまで計画して居る。

(付記) 本稿は、科学研究費・基盤研究(C)(研究課題名「仏教海外布教史の研究」、課題番号17K03052)にもとづく研究成果である。